

このまちでありのままに生きたい

1. 「情緒不安定な人や怒りっぽい人」と犯罪の発生との関係はあるのだろうか。

現在、内閣府は私たちの社会の治安に関する調査を続けています。この調査は全国の3,000人へ犯罪に対する不安について意識を調べています。そのなかに「自分や身近な人を犯罪に巻き込むかもしれないと不安になる組織や個人は何か」との設問があります。その答えで一番に多い項目の答えは「情緒不安定な人や怒りっぽい人(すぐ切れる人)」を選んだ人は最も多く、調査回答者全体の49.4%でした。これは何を意味するのでしょうか。さらに犯罪に巻き込まれるかもしれない場所として、「路上」つまり、自分が歩いている道で犯罪に遭うと不安に思っている人も53.9%います。特に30歳から40歳くらいまでの女性が多く答えています。

2. 「治安に関する調査の背景には」

治安の調査のなかに「犯罪に対する不安」との項目をつくり、「自分や身近な人を犯罪へ巻き込むかもしれないと不安の原因になる組織や人」を聞くこと自体、大きな問題を持っていると思われます。

一つ目は、現在の社会は自分が生活する地域を離れて仕事をしなければならないことが普通になっています。朝早くから働きに出かけ、夜遅くに家に帰る毎日を送る人がたくさんいます。そして地域社会の一人ひとはいろいろなつながりを持ちたいけど、つながれる余裕がないのが現実です。バラバラに分解されている人、そして社会から取り残されたくないために情報を得る手段をマスコミにたよっている現況があります。このような一人ひとりが孤立している状況は不安にあおられ、その不安の原因は日頃から「不審な人」とされている人に向いていきます。そして私たちに潜在化している「危険な人」が顕在化されてきます。それが現実の社会づくりの基本データになるとの循環があると思われます。

二つ目には私たちが情報源と依存している「マスコミの報道」の人権感覚は「どのようなものだろうか」との問題です。新聞の記事のなかには、特定の人たちへの偏見、差別がある報道があります。たとえば、社会を驚かす事件の報道のなかに「容疑者は精神科への通院歴がある」など、現在でも堂々と書かれています。

時折流れているマスコミの報道を糧に私たちの差別性は培われてきたように思えます。新聞、テレビの事件の報道で、「被疑者は精神科への通院歴あり」と書かれると、「精神病の人はひどい事件を起こす」と、イメージをつくりあげます。さらに誇張された論調で書かれている記事を読みますと、「精神の病は怖い」とする考えを受け入れ、精神の病への偏見を増幅します。現在も精神障がいの人たちは「何を起こすかわからない」不気味な「潜在的犯罪者」として社会通念が作られています。「精神病の人が社会で生活しているからこんな犯罪が起きる」「なぜ精神病院へ隔離しなかったのか」と社会からの排除の対象になっています。精神科だけが特別であり、心臓の病、肝臓の病の通院歴は報道されません。なぜ精神の病だけが報道のなかで特別扱いをうけるのでしょうか。

三つ目は、この調査は治安対策を創り出す重要な根拠とされて犯罪と「情緒不安定な人、怒りっぽい人（すぐ切れる人）」を単純に結びつけ強調していることです。精神的に安定していないことが犯罪につながり、その一番の危険性のある人たちが精神の病のある人たちであると社会の常識が作られています。

法務省は犯罪白書を毎年、発行しています。そこに精神障がい者の犯罪についての資料が出ます。2005年の調査では「刑法に基づく犯罪を犯して検挙された人」は年間37万9,602人います。そのうち精神障がいのある人は999人、及びその疑いある人も含めると総計は1,655人で、0.7%と非常に低い割合です。1,000人の犯罪を犯した人のなかで精神障がいのある人も含めて、7人です。交通事故の割合よりも低いのです。しかも、犯罪の種類も窃盗、詐欺などが多くを占めています。凶悪な犯罪である殺人は58人、強盗17人、放火54人などは少ないのが現実です。そして、犯罪の特徴としては、家庭のなかで家族に対して起こす犯罪の占める割合が大きいことは知られています。精神の病と犯罪の相関は低いにもかかわらず、マスメディアの報道などから受けるイメージと現実の資料から見る実態には大きなギャップがあることがわかります。そして社会の一般の認識と大きく違いを反映しています。

「このまちでありのままに生きたい」
大阪精神障害者連絡会
事務局長 塚本正治 P49～58 掲載

大阪の池田小学校事件の二次被害から見えてきたこと

なぜ「不可解な事件」と「精神の病」はつなげられるのでしょうか。

この事件では「なぜ、子どもたちが殺されなければならなかったのか」の疑問が吹き出しました。自らを納得させる答えを探しました。そして容疑者の「精神病薬の依存症」、「精神科への通院歴がある人」などと新聞、テレビで報道されたことを私たちは結びつけました。さらに「精神の病のある人だから、こんな理由のわからないことをした」と、事実と離れたところで、私たち自身が答えを作り出したと思います。

「精神の病の人たちの現実の生活」は今なお社会の裏側に隠されたままになっています。「心の病気とレッテルを貼られるのがいやだ」「世間体を気にしないで生活したい」「気狂い家族とよばれている」など精神障がいへの地域社会での偏見、差別が根強いことが調査からもわかりました。そして差別を恐れ、地域の人たちへ「病気のことを知られてしまう」ことをおびえている現実が続いています。

ひっそりと身を隠しながら生きている人たちは、「都合のよい問題解決の対象」にされることがわかります。日頃より「犯罪の予備軍」としておけば、犯罪が起きた時、実体のない存在は簡単に「悪物」にされます。しかし大多数の人は社会からの「差別」を恐れ、自らの病気を語り「カミングアウト」できない状況にあります。

大阪の池田小学校事件は背景にある社会の問題には触れず、個人の問題として語られます。権力を支配する人たちがこの社会の秩序を維持したいためか、社会の不備や矛盾を隠ぺいするために「精神の病のある人」は不可解な存在であり、犯罪を起こす怖い人達と、巧妙に結びついているように思えます。その社会の幻想のうねりに私たちは巻き込まれて、一人ひとりの問題として考えていないことがはっきりと見えてきました。

精神障がいのある人たちの現実の生活を踏まえた報道ではなく、「幻想」がつくられて、それが操られた現実があったから池田小学校事件の「二次被害」は起きたのではないのでしょうか。

病気のことをわかってほしい

社会に作り出される「精神の病への怖さ」の幻想を壊そうと大阪精神障害者連絡会では、自分の病気のことを語る会を継続しています。まず自らが病気の呪縛から解放されることから始まります。人とのつながりのなかで、病気をとらえなおすことを試みています。そして自分の病気を否定しない生き様をみんなと共につくっています。

塚本正治さんは病気のことをわかってほしいと訴えます。「一人ひとりが他の人とは違う精神的、肉体的限界点を持ち、そこに『命の安全弁』みたいなものがある。この限界をこえると命の安全弁が飛んでしまい発病する。たとえストレスをとりのぞいたとしても、病気は残り、治療が必要となる」と病気の成り立ちを説明しています。

ある男性の話を紹介します。彼は高等学校を卒業後、大きな旅館の板前の見習いをして、働いていました。彼は小さい頃から、東京の美術関係の学校で学ぶことを夢みていました。働いてお金を貯金して、念願の学校へ入学できました。家族からの仕送りもなかったので、学費、生活のためのお金を稼ぐために、朝早くから新聞配達、そして昼は学校、深夜の仕事を続けました。限界まで働きながら、必死で絵の勉強を続けました。しかし、絵の勉強は、うまくいきませんでした。そこで家に帰ることを親へ相談しましたが、「今さら家に帰ってくるな」と反対されました。どうにかしようと必死でがんばり続けたが、身も心も疲れ切ってしまって病気になってしまいました。

この話を聞かせていただき、彼は「精神的に弱い」のではなく、自分をトコトン追い詰めた結果、病気になったことがわかりました。限界を越えて、働きすぎると精神の病気になる。つまり、精神の病気は特別な病気ではないのです。しかし、精神の病気の本質をあいまいにして、「怖い病気」とか「精神の病気と犯罪は結びつく」との幻想が続いています。本人が病気のことを語ることが一番わかりやすいと思います。誇張のない話は一人ひとりの気持ちときっと繋がると思います。

「ひとりぼっちにさせないまちをつくろう」

大阪市の生野区・天王寺区・東成区では精神障がいの人への生活支援の地域での活動が続いています。一日中、家に閉じこもり暮らしている人がいます。昼間、人との出会い場所を見つけられない人もいます。そこで、まちへ出かけ、多くの人とつながりあえる機会をつくれる場を創りだしています。精神障がいの人たちを「ひとりぼっちにさせないまち」をコツコツとつづけています。

具体的にはどのようなまちづくりなのでしょう。集う人たちが「ほっとした気持ち」になれる場所。自分の悩みが話せる相手がいる、そして、このまちで「ありのまま」の自分で生きたいと、集える場、働く場づくりをしています。喫茶店をまちのなかにつくり、「ほっとした気持ちでHOTなコーヒーと一緒に飲みたい」と集える場があります。昼寝ができ、リラックスできる場もあります。皆でコーヒーを飲みながら、笑いを交わしながら、話が生まれます。

「病院から、会いに来てほしいと何回も電話があったんや」との話が広がります。「どないしたんやろ」と顔を見合わせる仲間がいます。入院している仲間のことを心配した会話が続きます。人と人のつながりが生活の空間を超えたところまで広がります。病院で不安な気持ちで入院している人たちには、心強い人間同士のつながりがあるように思えます。

ゆったりとした時間が流れる。まちの人のまなざしを「しんどく」感じる人には「隠れ家」があり、ゆったりと緊張を解き、ぐっすりと眠れる場になっています。人を信じられることが気持ちと体の緊張を解くのです。

このまちには、社会が作る「精神の病への幻想」は入り込む余地がないように思えます。生身の人間関係には、単純な偏見や差別性を壊していけるエネルギーがあります。大阪の池田小学校事件の後、生野のまちを訪ねました。作業所の人に「事件があって、何か変化がありましたか」とたずねました。返ってきた言葉は「前とかわりません。一人ひとりをよく知っていますから」と、あっさりかわされました。日頃から、生活を互いに重ねていることが偏見や差別の波に巻き込まれないことであることがわかります。



参考文献

- (1) 内閣府、第2編 平成16年度を中心とした障害者施策の取組、第3章社会参加へ向けた自立の基盤づくり、障害者白書、2005.
- (2) 呉光現、チャンネルを変えてくれませんか？ 季刊 Review 10(2)、2002.
- (3) 滝沢武久、序章 池田小事件を考える、精神障害者の事件と犯罪 中央法規、2003.
- (4) 山本深雪、大阪の小学校での事件を受けた議論のあり方について、福祉労働 92、現代書館、2001.
- (5) 大阪精神障害者連絡会、大阪教育大学附属池田小学校事件報道による二次被害を受けている精神障害者の訴えたい事、2001.
- (6) 法務省法務総合研究所、各種の犯罪者による犯罪の動向、第5節精神障害者の犯罪、犯罪白書、2004.
- (7) 塚本正治、精神障害者自らの取り組み、自立と共生を求めて、障害者からの提言、解放出版社、1998.



終わりに——

あなたはひとりぼっちではありませんか。

私たち人間はいろいろな悩みを持ちながら生きています。しかし現在、何事もないように皆と同じ様に振る舞い、人との違いを緊張しながら隠して生きていることが多くみられます。人と違うことを他人に見せることは「弱味」をみせることにつながるかもしれないとの不安が拡がっているように思えます。その状況では、自分は皆と同じ様に「普通」であることを確認しなければ安心できません。もし他の人が「あいつはおかしい」と言い出すと排除され、病人、障がい者にされてしまう危険性を感じているからです。

私は悩みながら生きていることが「人としての証」と思っています。そして自分のありのままの姿や悩みをさらけだせない状況は、ほんとうの自分の存在が見えなくなります。このように現在の状況は相互の信頼関係の底が抜け落ちている状況ともとらえられます。

多くの精神障がいの人たちが自分の気持ちを口にも出せないでいます。「精神病の再発と疑われたりすることが怖い」と話します。病気とされるまわりの人たちの圧力を強く感じられるのでしょうか。すべてのことが個人的な問題とされる雰囲気があります。

最近、それを根深く支えているのは、「こころ主義」ではないかとも考えるようになりました。複雑な社会環境、人間関係を人のこころ、その内面の問題に封じ込めて出来事の原因をわかりやすく説明しようとする考えです。たとえば愛知県の豊川市で起きた主婦殺害事件の少年の精神鑑定は、「少年の心の闇」にだけ光を当てました。「少年が人を殺す経験をしてみたかった」との動機を少年の行動の「異常さ」に帰結させて、彼の犯行の要因を「アスペルガー症候群」の疾患としてとらえました。そして彼は障がい者とみなされました。

一方、少年を殺害へ追い込んでいった学校、家庭、地域などの「社会の病理」は一切、問われませんでした。もし、少年が過剰に社会に同調させられて、自己の存在を揮発させている状況が続いて、耐えられなくなって犯罪に至ったと考えるならば、少年と共に「社会の病理」の原因も裁かれるべきではないでしょうか。しかし「事件を起こした原因はあなたの心の問題で、あなたの責任よ!」と個の内面の問題に単純に封じ込める状況が続いています。

大阪の生野で精神障がいのある人たちが「自分の生きざまのなかで病を語る」シンポジウムに参加したことがあります。精神障がいのある人たち自らが生きてきた歴史、自分の生活、そして病気を語りました。その話を聞いて、自分の過去の悩みと重なることを実感しました。そして精神障がいに対する差別は「無知」から生まれてくることに気がつきました。

「夫との人間関係、子育ての悩み、家のローンの精神的負担、姑との関係のこじれに悩み、精神的に追い込まれていく話。「どうにかしよう」と内職、新聞配達と体を酷使して、無理を続けたこと。かんばり続け、追い込まれ、そしてついに病気になったこと。ガス自殺未遂、そして飛び下り自殺未遂を繰り返したこと。さらに夫から「別れてくれ」との話があり、家族会議の末、協議離婚になったこと。今では「地域の溜まり場である作業所でいろいろな人たちとの出会いがあり、それで元気になっている」と話を聞かせてもらえました。

これらの話をたどっていきますと、決して「精神の病は個人のこころの問題」ではなく、むしろ人間関係、それを取り巻く社会の様々な価値観により翻弄された結果である「からだの現

象」と考えられます。問題の本質は「ここにあらず」との結論になります。むしろ私たち一人ひとりが時代の大きなうねりに無抵抗に巻き込まれてしまっていることが問題なのではないでしょうか。そのうねりを巻き返せる一人ひとりのパワーが「人権」であると思います。人間は弱い動物です。しかし弱いからこそ、つながりあえる術を持っています。いろいろな人との出会い、そして「連帯」が苦しい状況も変えていけるきっかけになることを信じて生き続けたいと思います。

このブックレットは(財)反差別・人権研究所みえの事務局のサポートを得て

つくらせていただきました。大澄晃久さん、水谷和之さん、

杉山政敏さん、佐々木崇典さんをはじめ、

多くの人たちからの協力をいただき、編集しました。

本当に感謝いたします。ありがとうございました。

2007年7月10日